
テディーベアとクリスマス

萌乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テディーベアとクリスマス

【Nコード】

N0952J

【作者名】

萌乃

【あらすじ】

「クリスマスなんて関係ない」と、強がっていた受験生な少年のもとへサンタクロースから、プレゼントが届く。中身はジッパーの付いたテディーベアで……。とっても妄想100%でとってもクリスマスな作品です。

「ちょっと、兄ちゃん早う起きなはれや」

朝っぱらから、べしべしとたたき起こされた。

「で、何食べるんや。パン？ ご飯？ それともわしか？」

——なんだこの下ネタ野郎…。

しかし、顔だけ見ていると、とても可愛い少女である。

白いワンピースにピンクのフリルがたくさん付いたエプロン。

こいつと出会ったのは、つい昨日のことだった。

..

今日は12月24日。

恋人たちの聖夜。

いわゆるクリスマス・イブだ。

だが、15歳で、来年は高校受験の中3の俺にとって、そんなものは関係ない。

塾からの帰り道そんなことを考えた。

「はぁー…」

ため息をつくとき、その息は真っ白だった。

空を見上げると、ちらちらと白い雪が降っていた。

..

家に帰っても誰もいない。

しかし、ふと郵便受けを見ると、ここにだけはクリスマスが来ていたようだ。

宛先は俺。

送り主はサンタクロース。

たいして面白くもない冗談だ。
わかつている。

サンタクロースはいないってことぐらい。

「……」

——頭ではそんなことを考える俺だが、貰い物は大切にする男だからな…

少々苦しい言い訳を考えながら、包装紙をびりびりと破いた。
すると、中から赤い箱が姿を現した。

なんだろう……

ゆっくりと箱を開けると、中にはぬいぐるみが入っていた。
それも、けっこうでかい。

ふわふわとしていて、手触りのよいテディベアだ。

——おいおい。俺は小学生かつつの。
なんだよ、テディベアって。誰が喜ぶんだよ。

それでも、俺はその手触りを楽しんでいると、そのぬいぐるみの背中部分にあたる所に何かがあることに気付いた。よく見ると、ジッパーが付いていたのだ。

「何だこれ」

俺がジッパーに触れようとしたとき、「ううううう」とうなり声が出た気がした。
気のせいかな、と思い直し、再びジッパーに触れようとしたとき、事件は起こった。

ぬいぐるみが、動いた。

けっして、比喻でもなんでもない。あろうことか、そのぬいぐるみは喋りだしたのだ。
ぴょん、と俺の腕から逃れたぬいぐるみは、びしっと俺を指さすと怒りを表した。

「ちょ、何するんや!」

「え、関西弁?」

「そこやないやろ! 兄ちゃん、なに人の社会の窓、勝手に弄ろうとしてんねんっ!」

何故か関西弁を話すテディベアは、どうやら相当頭にきてるらしい。

「で? 何の用や」

そして、とても偉そうな態度をとっている。

「じゃあないのう…。これやから、ゆとりは」

と、呟いたテディーベアは、お尻を振り振りして変な踊りを始めた。

——え、何コイツ。すごいムカつくんだけど！

ていうか、よくよく考えてみると、社会の窓って何だよ。どう考え
ても小物入れだろ！

そのとき、突然叫びだしたテディーベアは、またしても上から目線
でものを言う。

「よう見とけよ…。あ、来た来た来た、来たでーっ！」

そして、茶色いテディーベアは金色の光に包まれ、俺は、気を失っ
た。

..

「……！ ……いい！ おいつ、起きろ」

——どうやら、俺は気を失ってしまった。

「あれ、関西弁のテディーベアは？」

あたりを見渡しても、俺のそばには可愛い女の子が一人だけ。
しかも、もろタイプだ。

長い黒い髪に、透き通るような白い肌…着物が似合いそうな彼女は
白いワンピースを着ている。

「はあ？ 関西弁のデディーベア？ ぬいぐるみが喋るわけないやん」

……とても可愛いが、とても口が悪い女の子も、関西弁だ。

「兄ちゃん、願い事がなかなか言えなかったんは、まあ思春期やもんな。しゃあないわ」

「願い事？ なんのこと？」

「何を寝ぼけたこと言うてんねん。兄ちゃん、欲求不満で機嫌悪かったんやろ？」

どうやら、この関西弁の可愛い女の子は性格も悪いらしい。

「せやからな、わしも考えたんや。流石に人を作ることは出来へんからな」

ふー…と、何かを成し遂げたかのようにキラキラしながら、胸のあたりをパタパタする。

それにしても、何を言っているのかはさっぱりだ。

「さて、始めよか」

女の子は白いワンピースに手をかけ、するすると脱いでいく。ついには、下着姿になった。

「ちょ、ちょっと、何してんですか！」

「はあ？ あ、そうか、兄ちゃん自分で脱がしたいんか。とんだマニアックやのう」

「な、何言ってるんですかつ…！ ていうか、そもそも君は、誰なんだよ！」

……。

沈黙が流れた。

「兄ちゃん、大丈夫か？ さっき、わしのことさんざん弄くりまわしといて、何言うてんねん」

何を今さら…というような顔で、その女の子は大きなため息をついた。

「え？！ 弄くり……」

——そんな嬉しい覚えはな……ゲフンゲフン。

「さっき、って言えば、変な関西弁の奴しかいなかったはずなのに……」

「……。兄ちゃん。いい加減いらいらしてきたわ。わしの大切な社会の窓、開けようとしたん忘れたとは言わせへんで」

——社会の、窓…？

「え、いや、ええ？！ けどさ、全然違うじゃん！ フォルムとか

性別とかあっ！」

俺は、混乱していた。

だって、おかしいじゃないか！

この女の子は、自分がさっきのテディーベアだと言っているのだ。
どうしたら、ぬいぐるみが女の子になるんだよ！
そんなことは、あり得ないんだ。

「だからなあ。もおええわ。言っといたるわ」

すう、と大きく息を吸って、その女の子は目をぱちっと開いた。

「これが、クリスマスの力！ クリスマスの魔法！」

力いっぱい叫ぶ。

「そんでな、魔法は一生解けへんのや。…ふう」

「……………。…ええー?!」

「なんやその、マスオさんみたいな驚き方！」

「じゃあ、君はずっと、そのままなの？」

「まあ、そうなるわな」

「その格好のままなの？」

…………。

その子はちら、と自分の姿を確認した。

「まあ、あんたはんが望むならなあ…ふふふ」

不敵に笑ったその様子は相当エロいが、さっきのテディーベアだということ进行を思い出すと、若干いらいらした。

「ま、なんにせよ、これからよろしゅうな」

「いやいや…、どこへなりと帰って下さいよ」

「断る」

俺の言葉を見無視して、そのよくわからない女の子(?)は勝手に俺のベットに、ぽすっとかわいらしく座った。

そして、そのまま住みついてしまったのだ。

..

「おい、兄ちゃん。回想はいらんから！ 学校遅刻しまっせ」

結局、ホットケーキを勝手に作って俺に無理やり食わせた。

「う、うぐっ…。あ、うまい」

若干、荒々しく口に突っ込んでくることは、この際気にしないことにした。

それでも、家にこんな可愛い子がいて、朝起こしてくれる。

そんなシチュエーション、なかなかないもんだ。

「サンタクロース、本当に居るのかもしれないな」

ふと俺は、そんなことを呟いたのだった。

（後書き）

お久しぶりです！最近あんまり更新してませんでしたがお許しください！

今回は、久しぶりの短編です。

続きが読みたい！と思えるような作品ではありませんが、そこは皆様の妄想で続きを考えてください★

このあと、めくるめく起こるR15なイベントなんかm∴ゲフンゲフン

それでは皆様、メリークリスマスっ！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0952j/>

テディーベアとクリスマス

2011年10月5日22時01分発行